



1985年(昭和60年)
9月号(No. 483)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部150円

目次

- 「山内ピッケル」に寄せて 柴崎 徹……………(1)
- 海外の山
納木那尼峰便り(平林克敏)……………(2)
- 日本山岳会創立八十周年記念(札幌)
暑寒別岳記念山行・山岳シンポ
ジウム・記念晩餐会……………(3)
- 『日本登山記録大成』
特別頒布について……………(4)
- 図書紹介……………(5)
- 「近江の山」他7点
東西南北、お知らせ……………(6)
- 報告……………(8)
- 自然保護委、科学研究委、熊本支部、
秋田支部
山の気象と気象学(7)
科学研究委……………(11)
- 追悼 栗飯原健三氏(望月達夫)……………(12)
- ルーム日誌・会員移動……………(12)(13)
- 八十周年第二次募金応募者ご芳名……………(11)
- お知らせ……………(14)(15)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

●創立記念日のため休業

10月14日(土)

八十周年記念行事(仙台) 特別展示
「山内ピッケル」に寄せて

柴崎 徹

日本山岳会創立八十周年記念事業の一環として、東北ブロックの晩餐会が仙台で催されたのを機会に、仙台にゆかりの山内ピッケルが会場小ホールに特別展示された。このようにピッケルをはじめとする多数の山内翁の作品が一堂に展示されたのは、仙台でもはじめてのことである。

山内東一郎翁は、明治四十五年、二十一歳で仙台に來てから、昭和四十一年、七十五歳で没するまで、戦前戦後の激動期を通してピッケル作りを貫いた最初のピッケル名工として知られている。日本山岳会が八十年にわたって歩んだとは同時代を山内ピッケルもまた歩んできたのである。その作品は時代とともに少しずつ変化す

るが、他に追隨を許さぬ厳しさと美しさを秘めており、山の道具としての最高傑作といえるものである。

山内翁は高邁な職人氣質に徹した方であつたが、山内ピッケルが生まれた背景として、東北大学金属材料研究所の存在が見逃せない。本多光太郎らによつて設立されたこの金属の世界的メッカで、山内さんは若い職工として励み、また鍛えられ、さらに研究開発された合金材料を実際に道具の材料として試すこともできたのであつた。また、当時の在仙登山界も山内さんのピッケル作りをさまざまな形で支えた。特に、帝大山岳部と二高山岳会関係者の支援が大きかった。そのような意味で、山内

ピッケルは、まさに仙台という土地柄を背景として生れ育った道具といつてよいであらう。

当日の展示品は、山内ピッケル十八本、ほかに参考品として仙台ピッケルとウィリツシュが加わり、ピッケル総数二十本、山内作のスティックピッケル一本、ロックハンマー二丁、採鉱用ハンマー三丁、アイゼン一足、写真三本などである。ピッケルは支部会員所蔵のものを主としたが、会員外の方々の協力を得て、生涯作を網羅できるように蒐集し、試作期一本、初期作三本、中期作三本、後期作九本、晩期作二本という構成になった。

これらのなかで特に注目されるものは、外国のピッケルをそのまゝ模した試作期の珍らしいピッケルと、初期作の二七五番のピッケルである。前者は、ヘッド長二九・三センチ、長さ九八・五センチのほとんどソリのない古典的なピッケルであり、後者は、フィンガーにNC1 昭和九の刻銘があり、ニッケル・クローム鋼からニッケル・クローム・モリブデン鋼への移行期が少くとも二七五番、すなわち昭和十年頃を示して興味深いピッケルである。



仙台における展示風景/撮影・相沢基平

みんなで八十周年記念事業を成功させよう!

お知らせ電話

234 六六五九

を注文されて山内さん自身、作るのに「ひしゃました(仙台弁でもてあますこと)」といっていたものである。最も重量の重かったものは、葛西森夫氏所蔵の中期作一二三番で、ヘッド長三三センチ、実に一一四グラムに達するものである。シャフトの材質にもよるが、戦中戦後のこの時期のものは一キロを越す重いものが多いようである。一方、昭和三十年以降のピッケルは、それぞれを比較す



磐司岩の山内翁記念碑とピッケル／撮影・三原征夫

ると、シャフトの長さこそ注文主の背丈にあったが、ヘッド長が一尺にほぼ限定され、重量も九五〇グラム前後におちついており、ピッケルやブレードの厚み、ソリなどもほとんど一定値を示し、高度に完成された作品となっている。

山内翁がピッケル以上に鍛えたのが採鉱用ハンマーである。ピッケルは道楽で登る山の道具だが、ハンマーは御国のためになるからといって、ピッケルを作らない戦後の時代にも、ハンマーだけはせっせと作っていた。山内のハンマーは、実に使いよく、どんな固い岩でも砕くといって評判がよかった。

アイゼンは四本爪、六本爪、八本爪を作った。展示された六本爪は、会員であった高橋憲二氏愛用のものである。スティックピッケルは仙台の郷土史家、故三原良吉先生のために、翁が贈ったものである。

戦後再び登山がさかんになり、山内ピッケルを求めて応じ切れぬほどの注文が殺到するようになる。山内翁は晩年、山内作とまづい字でかいた奴(ピッケル)を皆んな喜んでもって帰るのと愉快そうに語られていた。

しかし、山内翁は昭和四十年、新築まもない青葉城下の工場家屋を焼失するという不運に見舞われた。仙台空襲によって大町の工場を失って以来二度目の火災であった。そしてその翌年塵肺症の

海外の山

納木那尼峰便り

平林 克敏

早いもので、四月五日に日本を出発してから十日余りになろうとしております。北京からウルムチ経由、カシュガルに入り、中国隊と合流し、喀什で一七四〇kmの旅にそなえて準備を整え、四月十四日に喀什を立ち、タクラマカンの大砂漠の西端を横切り、ヤルカンドを経由、コンロン山脈の横断に入りました。二日目にアカズ峠(三三三〇m)からはるかに白銀に輝くコンロンを望みましたが、不毛大地にそびえるコンロンの姿は、ヒマラヤ山脈の遠望と異り、また一味違うものでした。

三十里営房から大紅柳灘の一三km、大紅柳灘から移馬に至る三四三kmの旅は、四五〇m以上の大地を走る苦しい旅でしたが、自然の雄大な姿と湖や峠の美しさ、特にコンロンからアクサイチンの高原に至る間は表現に余りある内陸アジア独特の美しい自然の姿でした。

二日間にわたる国境未確認地帯の通過もなんなく終り、Chinese Line of Controlの国境とIndian Clanの国境は、既に中国のコントロールする線で安定が保たれています。

コンロンの美しさもさることながら、チベット高原の美しさも大変なものでした。特にインダス河の源頭の広大な河川は表現が困難なほど広く、この源頭に達し、やがてサトレツジ河の源頭を越えますと、聖地、カイラスとマナサロワールの湖の見えるナムナニ峠の山麓に達することができま

す。

一九六〇年、二十五年前に故ガルトセン・ノルブとアビの頂上から見たグルラマンダータとカイラスの地にくることができたよろこびはひとしおでした。

一九六三年、サイバルが登れない時はグルラを偵察したい、と故深田久弥先生の家で、ロングスタッフの本をめくった日のことが夢のようです。

六台のランド・クルーザーと十一台のトラック、一台のマイクロバスがナムナニ峠の山麓についたのは、四月二十五日、喀什を出てから十一日目のことでした。全員六十八名が元気で大本営に着くことができ、よろこんでおります。

四月二十八日には、この地方の主都、獅泉河の次に大きい普蘭(タクラコット)に行ってきました。行く途中ずっと、ひとときわ高くアビが南に聳え、東にサイバルが鋭い姿を見せておりました。また西にナンダデビル、カメット、トリスル等：、一九六〇年にガルツルを通った時のなつかしい山の姿ばかりでした。テンカル峠の峠も、ウライの峠もすぐに確認ができました。フラン県の知事は、次回はネパール側から普蘭に来て、獅泉河にぬけ、喀什に旅することを特別に許可してくれました。

今、ナムナニ峠の北面、中央部から流れるザロマロンバ水河の舌端の水河湖の畔にベイス・キャンプを設営し、登山活動に入っています。BCを五六〇〇mに建設してからルート工作も順調に進み、今日(五月十八日)は七二六〇mに第三キャンプを設営することができました。中国側隊員も頑張っており、日本では考えられなかったほど仲好しのチームが出来上り、苦しい登攀を続けております。

お蔭様で、計画より一週間も早いテンポで進んでおります。降雪量が極端に少ないこの山は、雪

ため、仙台鉄道病院で七十五歳の生涯を閉じられたのである。

山内ビッケルのことは、翁の友人や山仲間が、何度か記録に残そうとしたことがあったが、『ビッケル覚書』などを焼失していることもあって果せないでいる。山内ビッケルについては『山岳六十二年』に平柳一郎氏の「山内ビッケル抄録」と題された労作がある。

山内翁の記念碑は、亡くなられた年の夏、山仲間の有志の手によって、仙台の西方、磐司岩の一面に建てられた。そこは、翁と親交の厚かった若き登山家三原千秋さんの記念碑に近い。

翁は、訪問される人達によく「ビッケルは作るが山には登らな

日本山岳会創立八十周年記念（札幌）

◎ 暑寒別岳記念山行

◎ 山岳シンポジウム

◎ 記念晩餐会

日本山岳会創立八十周年記念事業の札幌シリーズは、七月十三日弘前午前十三時三十分、北海道庁北門に集合後、濃霧の石狩街道の北上で始まった。この国道二二一号は、断崖絶壁の連なる難所であり、昭和五十八年十二月再開通した幻の国道である。

雄冬山道にかかる頃より、青空が顔をだし、増毛町からは、暑寒

い」と語っていた。しかし、どういうお気持ちの変化か、一度だけ持論をまげて山に登ったことがあった。その相手が三原千秋さんたちで、山は乳頭山であった。表磐司の一面に、はめ込まれた翁の記念碑には、

鉄心 山内東一郎

一九六六年四月四日ビッケルの巨匠近く、翁と故三原千秋君との永しえの語らいを願いここに建碑す

同年夏 旧友一同

と刻まれている。

『ヒマラヤを語る』

別山群が晴れやかに望まれる。

午前六時五十五分、山ノ神、暑寒荘に到着、七時二十分登山開始

二合目を過ぎ佐上台にかかると、日差しも一段と増し、暑寒の暑が強くなる、五合目の水場は、もう夏枯れで水が無い。八合目、扇風岩から、ガンケ沢、ボンシヨカン沢が、残雪と滝とで、見事な眺めを造っている。

が降らず、全面が青水におおわれた水河です。従って水河の動きも少なく、ルート工作には安全度の高い水河といえます。但し独立峰のため、風が強いことはまた格別です。五月二十五日ころ登頂体制に入り五月三十一・六月二日に第一次登頂を行ないたいと計画しております。

登山活動終了後はブラストラ河を下ってラサに行く隊、ナムナニ東水河の学術調査をする隊、普蘭でカイラス巡礼やバザールのことを調べる隊、カイラスを一周する人、マナサロワールで身を淨める人等、六班に分かれて調査活動を行なう予定です。

私は聖湖マナサロワールにボートで出て、山で失った多くの友人達の供養の札を湖底に沈め、古くは釈迦やガンジーと同じように、この美しい仏教の聖地で眠っていたらこうと考えています。

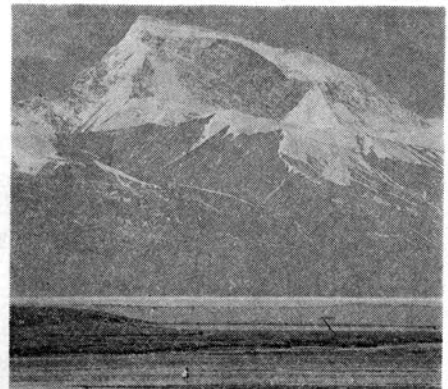
一九〇〇年の河口慧海師の足跡を偲び、マナサロワールを一周したり、古都タクラコットを訪れ、西ネパールのシンジャの谷に開けたマルラ王朝の関係を調べたり、やることは山ほどあり、手がまわりかねるほどです。

今回の日中友好納木那尼合同登山隊の試みは、中国の最高指導部の方々のご支援で実現した初めての試みであり、名誉総隊長の季夢華スポーツ相や中国側後援会長の楊得志閣下等の力によるところが大変に大きく、私達もキャラバン道々で大変な支援と協力を得ております。この点、史占春も大変によろこんでおり、この登山の成功は、日本の山岳関係者と中国登山協会との関係が、更に深いものになることを確信致しております。

このナムナニ合同登山を契機に中国登山協会は未踏の高峰三峰を日本隊に許可したこともその表れです。

聞きおよび所では、日本から中国を訪れる登山隊の中には、

山をきれいにゴミは持ち帰ろう



西チベット ナムナニ峰 (7,684 メートル)

日本人の物差しで中国の奥地の人々をはかる、ごく初歩的なミスをおかす隊の余りに多いことです。

これらの点を充分に中国側から聞いて帰り、何かの参考になればと考えております。

JACの皆様には手紙を出したいと思いつながら何もしておりません。宜しくお伝え下さい。

(五月十九日、ナムナニ峰BCにて)

追伸

この手紙を大本営(BC)から出す日(五月二十六日)登頂しました。十一時四十五分です。困難な登頂でしたが、日中各四人の計八名が登頂することが出来ました。私の人生でこんなに長い日は初めてでした。自分で登っている方が本当に楽です。では帰国まで……。

(五月二十六日、一六・三〇 BCにて 松田雄一宛)



山岳シンポジウム会場風景

七月十四日、朝の増毛の海は雲が低く垂れ込め、昨日とは一転雨模様の前兆で、波頭が岩石に砕け飛沫を巻き上げていた。

午前九時シーサイドホテル前を札幌へと出発する。

小雨の北大植物園の緑が眼下に見える北方圏センター国際会議場は、昭和五十三年十二月道庁別

正午過ぎ、北海道支部恒例の山頂野点が始まる。野点ならぬ、琥珀色や透明の飲物が出回ると、青い目のアリーンとバリーは、目を丸くする。午後二時、一時間遅れの重い御輿を上げ下山。五時二十分暑寒より車に乗り込む。五時四十分宿舎シーサイドホテルに着くと、地元増毛山岳会の方々から、明治十二年創業の地酒「国稀」を陣中見舞として、差し入れて頂く。早速、夕食時の焼酎として乾杯する。十八年前、深田先生の山頂の憩い「暑寒別岳」の想い出新たな一夜であった。

この増毛山塊は、二代目支部長伊藤秀五郎の北の山や、時雨音羽の秘境・冬峠、吉村昭の冬・海等の名作文学の舞台であった。下山しながら眺めた日本海に浮かぶ雲は、低気圧の合間を縫う、強運の記念事業の幕明けに相応しい光彩を放っていた。

山行参加者 山村正光、山村秀子、岡沢祐吉、三浦勝幸、高山岩男、坂田昌実、浅利欣吉、柳田涼子、岸栄、登坂信雄、建石八重、亀井秀子、水科行雄、横田春雄、中村テル、大塚玲子、相川修、石井忠雅、赤松光、望月達夫、橋本誠二、山川力、遠藤恵太、木下恵子、入谷浩右、久保孝一郎、庄司駒男、遠藤昭治、赤石喜恵子、野口礼子、岩崎三郎、河村皆子、坂井久光、久保田優一、平野明、アリーン・デワイヤー、バリー・リズナー、名越昭男 (順不同)

山崎安治責任編集

『日本登山記録大成』全20巻

特別頒布について

このたび同朋舎出版からの申し出もありまして、山崎安治氏の編纂された『日本登山記録大成』全20巻の大業を、日本山岳会創立八十周年を記念し特別価格にて頒布することになりました。

(全20巻内容)

①～⑥ 槍・穂高(明治25年から昭和51年まで。近代登山の黎明期から積雪期登山、バリエーションルート、極地法登山、残された未登録ルートと継続登攀の記録を収む)

⑦～⑩ 剣岳(明治40年から昭和51年まで。早期登山より現在までの登攀記録を収む)

⑪～⑬ 白馬・後立山(明治16年より昭和27年まで。初期の白馬岳登山よりバリエーションルートの開拓の記録を収む)

⑭ 笠ヶ岳・錫杖岳(明治27年

昭和45年まで)

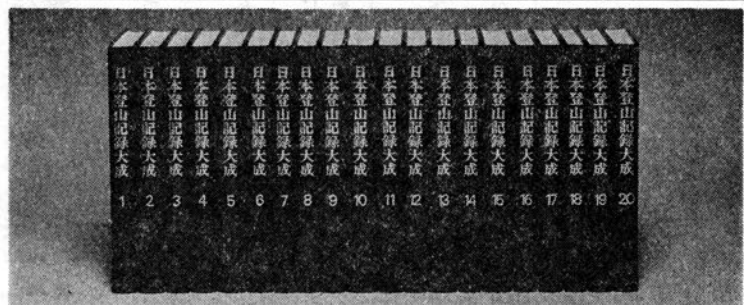
⑮ 薬師岳・黒部川(明治40年昭和41年まで。黒部をめぐる山々の主要記録)

⑯ 南アルプス(明治14年昭和40年まで。南アルプスにおける近代登山の発祥から積雪期登山、バリエーションルートの開拓)

⑳ 木曾駒・富士山(明治24年から昭和29年までの記録を収む)

〔特別頒布について〕
左記の特別価格にて頒布いたします。

特別価格 十六万円(定価二十万円) 専用書架付。
六回払、十二回払の割賦購入もできます(送料は版元負担)
希望者はハガキにて必要事項をご記入の上、本会事務局までお申し込み下さい。



ら幸甚と存じます。
〒600京都市下京区

中堂寺鍵田町2
同朋舎出版 山岳事業部
電話 075 (343) 0021

西寿雄日本山岳会々長の式辞。佐々保雄前会長の基調講演『日本山岳会の沿革』は、山岳会草創期の人々の人となり、ウェストン師と

小島島水、岡野金次郎との出会い等、会先駆者達の面影を彷彿させる話であった。

続いて、遥々、金沢よりこのシンポジウムに駆けつけて頂いた、カンチエンジュガン縦走登山隊長の鹿野勝彦氏は、豊富なヒマラヤ経験と、それに基く計画、八千米縦走とハンググライダー飛翔の複雑な組合せの快挙を、たんとと講話された。数多い若い隊員や報道担当者を含めた登山プロジェクトを見事纏め上げた氏の手腕に参加者一同感銘を受けていた。

続いて北大ダウラギリ厳冬期初登頂副隊長、越前谷幸平氏。豊富な気象データを駆使し、登山の科



学化、寒さに強い北大の底力を印象づけた。最後は、ブータン・ヒマラヤについて戸谷薫氏。ネパールやインドと異なる未知の国、ブータンの風物や五千米付近の高山湖を鮮明なスライドで映写し、克明な語り口であった。

◇◇◇

北方圏センターのラウンジには東京の晩餐会ばりの記念品即売コーナーが設けられ、ネクタイ、ルーパータイ、Tシャツ等が並べられ賑わっていた。国際会議場隣りのレストランでの記念晩餐会は午後五時四十分、ウイスキーの水割りサービスで開幕、浅利集会担当委員が六時に開会を宣し、橋本支部長に続いて今西会長の挨拶のなかで、全国七地区で記念晩餐会が行なわれるが、五番目の札幌は今までの処、最もスマートなお褒めの言葉に、わが国で一番泥臭いを負担するわれ等は胸をはる。

伊藤評議員の乾盃が終るや、今西会長が伊藤会員は、今年、永年会員になられる旨、会場に告げると一斉に拍手、誠に目出度い華やかな演出となった。続いて地元来賓の道岳連会長金子春雄氏のユーモア溢れる祝辞に満場爆笑。

そして、前日の暑寒別岳記念山の所感、佐藤、望月、赤松の諸氏と続く。神崎忠男前常務理事紹介のアリソン・デワイヤー嬢、バリー・リズナー嬢の登場で、会



図書紹介

近江の山

草川啓三著

滋賀県の主な山、一二四座を、伊吹山地／野坂山地／(京都)北山／比良山地／湖南・信楽の山／鈴鹿山脈に分けて紹介している。五〇〇以上としているが、今西錦司先生の流儀にしたがったものであろう。

「あとがき」でこわっているように、ガイド・ブックではなく、紀行文集だとなり、その語り口は気どりがなく、実に淡々と書いていて、読後感もまことにさわやかである。著者はいへん勉強家であり、読書家であること、巻末におびただしい参考文献が掲げられていることと、これらの資料が本文中のまぐらとなり、つなぎの役に登場するが、惜しむらくはせっかくの引用文の原典が、この一覧表にもれている個所が目につく。

これほど地元山城へ精力的な登山と調査に執念をもやして

ながら、肝心要めの参考コースタイムが各項目の末尾にないため、記録集としての価値を減じて、唯『近江の山』へ覚え書きに終っているのは、労作であるだけに惜しい。

最初から「滋賀県の山」だけを丹念に登り一本にまとめていれば、スキー登山、溪谷週行など、年月日の記載という大切な要素が大幅に省略されることなどなかったであろう。曽遊の山ほど抽象的なのに対し、本書のために登った山城では描写が当然ながら詳しい。

読者の便を計るため、各山地ごとに概念図を挿入し、著者が踏査した廃村と実村、現地取材の山名、谷名など苦心の跡がうかがわれる。が、地図トレースを友人に依頼したためか、瑕瑾が散見されて、結局、国土地理院の地形図を参照せざるをえないことになる。

地方山岳会出版局刊行のためか、当欄でとりあげられたと思うのだが、発行者が製本と私家版にたずさわり、往昔アングラ海賊本などで弊害をかついていただけに、未整理とはいえ、千部限定(A4判)で、知られざる不遇の近江の山、とりわけ鈴鹿山脈へスポットをあてた意義は大きい。京阪神の登山者にとっては、良心的な福音書でさえあると言ってもよい。

一九八四年九月三十日 京都山

ノ会出版局発行 三〇一ページ 一九〇〇円(阿部恒夫)

ナンガ・

バルバート回想

ヘルリツヒ

コッファア著

岡沢祐吉訳

ナンガ・バルバートを研究するの、今日まで何冊かの本が出版されていたが、この回想録のように三ルート同時に紹介し、また五十年近くの登山歴史を一つにまとめ上げた本、およびこのようなことのできる山は、ビッグ・ヒマラヤ多数あれど、ナンガ・バルバート峰しかないでしょう。

白い魔の山として名声高いこの山は、ヨーロッパ人にとっては、幾多の悲劇とそれに挑戦する話題にこと欠かなかったでしょうが、日本人が最も耳にすることがになったのは、日本人未登頂であるということと、一九八三年に日本隊が四隊も挑み、そして遭難というニュースで、この山が「魔の山」としてマスコミに取り上げられたからでしょう。

私たちが挑んだのもこの年で、「一九八三年・富山県山岳連盟ナンガ・バルバート登山隊」としてです。幸い私たちは

場は、一段と楽しく盛り上がり、鈴木邦之理事の軽妙な通訳は、この北方圏センターに相応しい雰囲気であった。

北海道外から二十三名参加された各地の会員を紹介しながら、JACには、会員の皆さんの絆、繋がりにより一層大切なことを、肌で感じた次第である。

晩餐会の締め括りは、芳賀孝郎副支部長。横さんの話や、女房同志の話に花が咲き長い長い二日間が、無事終了となった。晩餐会の看板を二次会々場に持ち込み、二十数名は会長と夫人、前会長と夫人を囲み、ススキノの夜遅くまで語り、散会とした。

晩餐会出席者 岡沢祐吉、三浦勝幸、浅利欣吉、野田四郎、柳田涼子、亀井秀子、水科行雄、横田春



東・西
南・北

やっとの思いで

たべた朝食

山本朋三郎

パーティーを組んでのトレッキングでは判らない、人前でたべる食事のむずかしさを、独り歩きの旅

雄、中村テル、大塚玲子、相川修、石井忠雅、赤松光、望月達夫、橋本誠二、山川力、熊谷正志、熊谷藤子、市根井孝悦、岡部みち子、木下恵子、淡川舜平、稲沢薫、兼平治水、入谷浩右、沢田長子、今西寿雄、今西芳子、山田二郎、神崎忠男、鈴木邦之、庄司駒男、遠藤昭治、赤石喜恵子、野口礼子、岩崎三郎、新上美穂、芳賀孝郎、岩崎貞子、新妻徹、高松秀彦、河村哲子、坂井久光、久保田優一、阿部淳、戸谷薫、越前谷幸平、大野秀樹、佐々保雄、佐々喜久恵、金子春雄、鹿野勝彦、平野明、佐々木孝雄、伊藤紀克、アリン・デワイヤー、パリー・リズナー、佐々木喜一、小林年、末岡睦、沼崎勝洋

(平野明)

で強烈に感じ、食べるという行為の尊さをつくづく覚られた。

ムクチナートの旅でのこと、マルパのバツテで朝食をしていた時、六、七歳の目鼻の整った女の児がハダシで、麻袋を半割りにしたのを上衣代りにかぶり、開きかか合せて胸の位置で片手で押えていた。

長旅で余り食欲もないが、キッチンボーイは食い切れぬ食事を作って出す。うまさうな炊事場においが、彼女をバツテの土間に誘い込んだのであろう。土間の片隅にジット立って、私の食事を見詰

紹介 オーストリアの登山に徹し、雪国特有の粘りで雪に勝ち、成功しました。

近年の急激な技術と装備の進歩によって、ドイツ隊の悪戦苦闘の歴史も、ただ歴史としてしか見つめられませんが、登山本来の姿はじっくり考えていかねばならないでしょう。

この回想録で著者は、極限の世界でくり広げられているいろいろな様子は、取られるために用意された税金とみてもええがよい、と慰めています。われわれ日本人には容易に受け入れられない感覚ではあるまいか。そして、白人とアジア人のおもしろい比較、実在が持つ永遠の真理について、白人は何の概念もない野蛮人である、という一文には、何かを感じずにはいられない。私たち登山隊のトラブルと比べ、はつきりと感覚のズレを見出してしまふ。

最後の登山リストには、一九八五年のイギリス隊、A・F・マリーから、一九八三年の川崎教員グループまでの四十九隊の記録が載っているが、悲劇と挑戦のくり返しが、改めてナンガ・パルバート峰のすごさを思い出さずにはいられない。私たちが登山の前にこの本を手に入れたら、日本人初登山に、より期待をふくらませていただろうか、より不安にかきたてられ

ていたのだろうか。恐らく後者の方になってしまったらう。

今後、登山の姿はどのように変化していくか想像できないが、このような先輩たちの足跡があつてこそ、極限の世界にも新しい変化が生れるのである。

一九八四年九月三十日 ペース
ボーリマガジン社刊 二二二ページ 定価一八〇〇円

(木戸繁良)

ヒマラヤのプチベツト

ラダック

ヒール夫妻著
宮持 優訳

最近のラダック旅行は、スリナガルからゆったりしたシートのバスで、ゴンパからゴンパへと案内され、予め下調べでもしておかないと、旅全体に曖昧な印象を得ただけで終わるかも知れない。

本書における旅の話は「ゾジ峠を越えて」から「ザンスカル」までの五章(全体の約二〇%)につくされている。時代はおよそ一九二〇年前後のことである。前半は現在のバス・ルートに近い旅であるが、そのポニー旅行は結構トラブルが多い。ちょっとした雨で道路が崩れやすいのである。

それに続いて、その街道のラマユル・ゴンパあたりから南下してザンスカルに向かう、シンギ・ラ(五〇六〇m)、パダムを経て、

ロータン・パスを越える旅を続ける。三田幸夫氏は一九三一年一二月をクル渓谷のマナリ村で過ごされたが、そのマナリを経てパタンコットから鉄道でスリナガルに戻る。この旅の季節は文章から想像するしかないが、新雪に悩まされる描写から判断して、多分秋の終り頃ではなかろうか。

これらの道はかなり苛酷な場面もあり、日数も今日の何倍かならう。私もあの界限でポニーしか利用できないルートを経験し、現在の自動車旅行がいかに楽なものであるか、よく理解できた。もともと、その自動車も一度ならず道路不通に遭遇しているが。

本書における旅の実態としては最近のヒマラヤ登山のキャラバンよりは、むしろきついものと推察される。

本書の著者はレーの病院に所属する英国人の医師夫妻で、一九一三―二五年頃にラダックに滞在した。著者の関心の強さと言おうか、教養の広さの原因か、ラダックにおける主要テーマはあらかじめ尽くされている。観察が鋭く、またその文章による表現も優れている。一例を挙げればカシミヤ・ショールの製法を、素人がよくここまで観察して解説したもの、頭が下が(一三三―七頁)。

図書紹介

めている。モンsoon季節の近い、シーズンはずれの旅で、トレッカーは私一人。ビスケットの小袋を差し出すと、手を出して、オイデ、オイデをするだけで動かない。もって来て下さい、の意志表示である。重ねて小袋を差し出すと、ソロソロと近寄り始める。途端、たった一言ではあったが、パッテのおかみの叱声が飛ぶ。大きな瞳をいっばいに見開いて、必死におかみの叱声をはねのけよう。

お知らせ

日本山岳会

発祥地を訪ねる

横浜文学散歩

横浜市教育委員会の主催で、表記の企画がたてられました。ふるってご参加下さい。

日時 十月六日(日曜) 午前

九時三十分 国電石川町駅南口集合

コース ウェストン師旧宅

址、共立学園、横浜正金銀行址(神奈川県立博物館、

高野屋旅館、寿町聖アンデレ教会址、花咲町聖アンデレ教会址など。

講師 石川治郎、近藤信行、垣内茂師(聖パウロ教会)

※詳細は神谷量平氏(〇四四・七三三・三七二)まで。

と自己格闘している気配がありありと感ぜられ、不憫である。ノロノロと近づいた子供はテーブルの紙袋をつかんで朝日で明るい表情へ出てゆく。

気品高いマルバのおかみの叱声でフト、暗い気持ちにおそわれた。

貧しいネパールの子供達のこと、ビスケットを与えたことで子供に物乞いを教えたしまったのではないのか?『物乞いするな』

とのおかみの叱声ではなかったのか。浮かぬ気持ちで独り食事をしていたら、男女二人ずつのこの家の

作男と作女が入って来て、土間に座り、宿のおかみから、仕事の前のミルクティーを一杯ずつもらう。

一列に並んで私の方を向いて飲む。彼等の目はジッと私を見ている。私の朝食は目玉焼、魚肉ソー

セージ一本、温かい、湯気を出しているオカユの鍋、それにコショウ、正油、ソースのびん、即席コ

ーヒーのびん、お湯のヤカン。何もないテーブルにこれだけ並ぶと

壮観である。

麦こがしや、味気の無いカユなどをたべている彼等から見れば、私の朝食は王様の食事であろう。

インドほどではないが、ネパールにもカースト制度があると言

う。開国以来、制度としてはなくなったが、差別意識は現存しているという。子供と大人の差、貧富

の意識は、すべてに自由平等など

旅の話はむしろ本書の一部を占めるものであって、長期滞在の経験から自然環境や住民の生活、或いはゴンバにおける行事などについての観察が豊富で、

内容の古さはあまり感じられない。できれば最近の写真集などを手許において読まれたら、大いに理解を進めることができるのではなからうか。

一九八四年十一月二十五日
未来社発行 三二八ページ
定価 一九〇〇円

図書紹介

旅の話はむしろ本書の一部を占めるものであって、長期滞在の経験から自然環境や住民の生活、或いはゴンバにおける行事などについての観察が豊富で、

内容の古さはあまり感じられない。できれば最近の写真集などを手許において読まれたら、大いに理解を進めることができるのではなからうか。

一九八四年十一月二十五日
未来社発行 三二八ページ
定価 一九〇〇円

アレクサンダーの道
——ガンダラ——
スワート——

オーレル・スタイン著
谷口陸男、沢田和夫訳
長沢和俊注及び解説

中央アジアの三大探検家、ブルジェワルスキーとヘーデン、そしてスタインは三人とも生涯妻を娶らなかった。彼らはそれぞれ専門分野は異なったが、東トルケスタンの茫漠たる荒野に魅入られ、それを配偶者にしたのである。

スタイン(一八六二—一九四三年)は一九〇〇年より一九一六年の間に三回にわたって東トルケスタンの探検を行なった。その三回目の旅の終りには、まだ空白地帯であったバミール中央部を北から南へと縦断しゾル

・クリ湖まで足を伸ばしている。この間の探検紀行には“Sand-buried ruins of Kotan” (“Kotān”の廃墟) 松田寿男訳、筑摩書房 “Ruin ancient Central-Asian tracks” (“中央アジア踏査記”) 沢崎順之助訳、白水社) などが、学術書には“Ancient Khotan” (2 vols) “Serindia” (5 vols) “Innermost Asia” (4 vols) などがある。

その後中国が政情不安となり、中国政府も外国人を中央アジアに入れることを禁止し、スタインもこの間はイギリスで学究生活を過ごしたり、諸外国を歴訪したりした。

彼がスワート地方(現バキスタン)の踏査許可を北西辺境地方の長官ノーマン・ポルトンから受け取ったのは一九二五年、すでに六十四歳の時であった。翌二六年三月五月スタインはスワート川流域を訪れる。この時の踏査紀行が本書『アレクサンダーの道』である。原本は“On Alexander's Track to the Indus”一九二九年、ロンドンで出版されている。スタインはすでに一九八九—一九〇四年の間、四回にわたるスワートを訪れている。それは彼が、まだ若かった頃より持っていたアレクサンダー大王の足跡を明らかにするという夢を、実現するためであった。インダス川中流域には難攻不落の「アオルノス」の砦が

あった。アレクサンダー大王はインド攻略の途次、この急峻な断崖上に築かれた砦に自らよじ登り、それを占領したと、遠征記に記されている。これまでのスワート行では、この砦を見つけることができなかったが、今回の踏査行で彼は見事この砦を探し出すのである。

本書は二十五章より成り、第一章、第十三章ではスワート川流域の仏教遺跡を調査しながらスワート川源流にある桃源境カラムの林まで入りこむ。峠から見たカラム村とその周辺の山山のパノラマ写真が美しい。第十四章ではスワート側よりインダス側へ、分水嶺山脈を西から東へ乗越して行く。第十五章より第二十二章は、本書の核心部でインダス川中流右岸にあるビル・サール尾根への登行と、その尾根上に「アオルノス」の砦跡を発見し、考察を加える場面である。第二十三章から第二十五章では、ビル・サールに別れを告げ、再び今度は東から西へ分水嶺を越え、途中、ヒンズー教徒からもイスラム教徒からも聖山とされているイラム山を訪れる。そして、スワート川左岸のサイド村に帰着するのである。スワート地方の美しい山や谷、そして集落、これらの風景の中で仏教遺跡や「アオルノス」の砦が次々に発見されて行

本人の感覚に強烈な拒絶反応を示す。私達の平等は彼等の不平等であり、彼等の当り前は私達には差別としてうつる場合もある。

日本の現代感覚をストレートに持ち込んでネパールの山奥に来ると、日本的朝食も、衆人環視の中では仲々たべられない。食う、ということにすべてを集結する強い意志がないと、朝食もたべられない。日本ではカツオブシや醤油で味付けした普通のカユも、ネパールの山奥の子供達には、知らぬ別世界の美味かも知れない。

パーティを組んでの旅の食事は気分がすむが、独り旅のトレッキングで、特に、キッチンポ

イを連れての旅は、天幕の中でソコソコ食事をしたくなる。それ程ネパールの山奥の人達の食事は粗食であり、多くの場合、食に金をかける余裕に乏しい。彼等の美食は味気ない麦コガシでも、満腹することが美食のように思われる。美食になった日本人には麦コガシばかりの食事は、たべられぬ粗食である。わざわざ日本から米、ノリ、梅干、カツ節持参のトレッキングは、実にゼイタクな食生活である。

日本での梅干の食事は粗食の代名詞のように使われるが、ネパールの山中での、日本米での梅干食は最高のゼイタクである。

「ブナ・シンポジウム」

に参加して

麦倉 啓

今年には国際森林年である。筑波の万博会場の近くには、全国から寄付を募って植林を行ない、「万博の森」の建設が朝日新聞社と森林文化協会の共同で進められている。

私もある講習会に参加して、営

林署員の指導のもとに、高尾山富士見台に、「ムラサキシキブ」を植えた。これから毎年のくらしい成長したかを見に行くのが楽しみである。

また、去る四月には、新たな緑

の文明を希求する国際的文化運動の機関として「緑の文明学会」(会長 茅 誠司)が誕生した。いまや危機に瀕している地球の緑を再生して、人間回復の基盤づくりをしよとの運動が世界的に高まっている。

そのなかにあつて、国際森林年協賛行事として、「ブナ・シンポジウム」(主催(財)日本自然保護協会、後援(社)日本山岳会外)が、六月十五、十六日の二日間、秋田市の文化会館で開かれた意義

紹介。この地方の持つ歴史の重みが、ずっしりとのしかかつてくるのを感じる。

本書の判型造本は初版原本を踏襲し、原本に挿入されている地図二葉はそのまま複元されている。また原本に収載されている写真は、原寸大ですべて収録されている。そして、長沢氏による詳細な注と解説が巻末に収められ、同時に氏による現在の「スワート紀行」がスタインの時代と比較され、興味をひく。読者が隅々まで理解できるよう、実に懇切丁寧に編集されている。苦心のあとがうかがえる。

三〇一ページ 五八〇〇円
白水社 一九八四年
(田村俊介)

北大山岳部々報

十二号

北海道大学
体育会山岳部編

伝統ある北大山岳部の部報が十三年ぶりに発行された。昭和四十七年四月から五十七年三月まで、十一年間の活動記録の集成である。

目次構成は年度概説・山行記録、知床遭難報告、座談会、研究、紀行・エッセイ、海外記録、追悼からなっており、十年を超す部報の編集に当っては、並み

並みならぬ苦勞があつた。

編集後記によると、昭和四十七年に十一号を発刊して以来、数回にわたり十二号作りが試みられたが、いずれも条件が整わず具体化されなかった。五十七年に軌道に乗った編集も三年の期間を要した。編集作業は若手OBが中心となり、特に現役には直接参加してもらわなかった。現役が部の運営、山登り、学業と忙しく、部報作りに参加することは大変であるし、十一年間もの記録となると、現役中心では不可能であつたと思う。本来部報とは実際に山に登っている現役が、現実の山登りと対比させながら作っていくべきで、部報を作りながら過去の活動を見直し、新しい方向を見つけていくことは、山に登っている現役がやっていると、山に登っていないものでは、はじめて意味をもつものではないだろうか、と、今後はより現実に密着した部報を目指そうと手厳しく反省している。

部報の骨格となる各年度の概説欄からは、部の運営方針や部員の考え方が赤裸々に述べられ、部の変遷が見られる。山行記録欄は北海道の山城を日高山脈、中央高地など九分分類し、更に道外の山とし、各年度とも地域ごとに山行記録を列記し、主な山行には概念図と解説を付し、記録性を持たせてある。さすが日高山脈へは入山が目立ち、未踏の沢や側壁の直登などエネルギッシュな登山は昔も今

も変りない。

研究欄では「ルームの食料」「雪崩研究会について」「アイゼンの破損について」の三篇が掲載されている。「アイゼンの破損について」は、『山岳』七十五年に発表されたもので、この種の高度な研究発表が今後に望まれる。

海外記録欄はアラスカ・マツキンレー峰、ヒンズークシユ・シャヤーズ、ガルワール・トリスル、テシラプチャビーク、カラコルム・クンヤンチシユ北峰、バルンツェ峰、バタゴニア、ダウラギリ主峰とOB主体、部員主体と海外遠征の記録は多い。特に厳冬のバルンツェ峰、それに続く厳冬のダウラギリ主峰は最大の成果であり、登山界の注目を浴びた快挙であつた。

海外記録の多くは既に報告書等で発表済みで、この部報には登山概要、略図、写真、発表文献と簡潔にまとめているので、詳しくは報告書を参照されたい。

昭和六十年一月二十五日 札幌市北区北七条西七丁目
北海道大学サークル会館内
北海道大学体育会山岳部部報
編集委員会発行 B5版 三
二五ページ 頒価五〇〇〇円
(高澤光雄)

図書紹介

は大きい。

会の内容は東京の新聞や、現地の秋田魁新報等に詳しいので省略するが、日本全国から住民、自然保護団体の代表者、学者、林業関係者、サラリーマン等、いろいろな職業の人々が、二日間、延千二百余人余が参加した。

二日間に亘る二つの分科会で、「ブナ帯文化」と「ブナ林の現状」について熱心に討論が行なわれた。

最後の締め括りのパネル・ディスカッションには、環境庁、林野庁も出席された。種々熱と力の入った討論のなかで、沼田日本自然保護協会理事長は、「絶対人に手をつけない核となる原生、自然地域」コア・ゾーン、(二)その外側に保護を優先とするが、ある程度の開発はやむをえないとする地域「バッファ・ゾーン」、(三)更にその外側を開発利用地域とする「カルチャー・ゾーン」としてそれぞれ活用する方式、即ち「三重構造方式」を提唱された。この方式は既に外国では行なわれており、わが国で初めての試みとして、白神山のブナ林に導入してどうかと提案された。

このようなシンポジウムに、林野庁が出席されたことは前例のないことで、当局の前進であると私は思う。文化面ではブナ帯文化と照葉樹林文化との対比、現状報告では自治体の一部が天然林の保護

運動に取組んでいること等が強く印象に残った。

従来、ともすれば森林を単に木材資源として経済面からだけ捉えがちであったが、哲学、考古学、生態系、環境保全等、多角的視点から捉え、立体的に話し合ったシンポジウムは前例のないことと思う。

パネル・ディスカッションの総合同会役の石 弘之氏は、「このような方式は、全く新しい自然保護運動の戦略であり秋田方式」と命名したい」と発言した。また、「われわれはブナ林の保護に對して歴史的責任を負っている。何万年、何十万年の後世の人に何をなすべきかを考えた場合、われわれが先祖から引き継いだブナ原生林を『これ以上悪くしないこと、できることならむしろ良くして引き継ぐこと』が最少限の責務ではないかと考える。更には自然保護は、その地域の住民の生活、要望を組み込んだ運動でなければならぬ。沼田理事長の提案した方式なども、今後の方向づけになると思う」と結んだ。

今回の二日間に亘るシンポジウムほど実りの多いシンポジウムは初めてである。

私は翌日のエクスカッションには参加できず残念であったが、会期中、秋田市の空は爽やかな快晴であった。

(自然保護委員会)

図書紹介

御嶽の見える村

——木曾開田高原日記——

澤頭修自著

著者は木曾数原に生まれ、木曾谷各地に勤務したことのある小学校教諭。この本の舞台である開田村には、昭和四十四年四月から四十九年三月までの五年間、在任したという。

御嶽の西、木曾のチベットといわれたこの村人にとって、木曾福島へ行くことは「町へく」である。ことであり、村へ帰ることは「山へ登る」ことだった。標高一〇〇メートルを越す、きびしい気象条件の中で、その名の通り江戸時代から稲作が行なわれてきたところである。

昭和四十年代といえ、巷に高度経済成長の音が聞かれるころ、民俗学に関心をもち著者は、日々失われていくこの土地の暮らしを克明に書きとめてきた。それが春夏秋冬に分けられ、歳時記風に収められている。どこを開いても山村の人々にそそぐ、あたたかな著者の目が感じられる。

あるときは、数少なくなった麻織りの老女をたずね、麻の栽培から麻布に仕上げるまでの工程を記録している。また、かつてはこの家でも飼っていたと

いう木曾馬の話もある。子馬が産まれると赤飯をたいて祝い、死ねば葬いを出したという。短足で山道に強かったといわれる木曾馬も、いまは絶滅の危機にあるとか。

村人たちとともに釣りや山菜取りを楽しみ、時にはジバチをとって賞味する。ソバや漬物、年越しや嫁取りなどの慣習、民家を調べチョウズバ(便所)についても一稿を記すなど、私たちが忘れ去ろうとしている生活の原点を呼びさましてくるようだ。

あとがきで、道路建設がすすみ、便利にはなったものの、過疎化や台風・豪雨、御嶽噴火による降灰などの災害が続く中で、なお生活力旺盛な村の人たちを讃えている。

処々にはさまれた写真も、著者の撮影になるもの。苗代のかたに残雪の御嶽をおいた扉の写真は、ただただ美しい。

庄野英二氏の序文によれば、著者が青年時代に妻籠で下宿していたのは旧藤本陣奥谷(現郷土館)で、藤村の『初恋』のモデルおゆふさんの部屋だった由。このことが、著者にふるさと木曾の暮らしを追わせるきっかけとなったのではないかと、私は勝手に納得したのである。

B6版 二二二ページ 一九八五年二月 実業之日本社 定価一五〇〇円 (蜂谷 緑)

車窓の山旅

——中央線から見える山——

山村正光著

汽車の窓から景色を眺めながら旅をするということには、そこはかないロマンが感じられる。まして視点が山に注がれている場合山好きの者には、その感が深い。本書がベストセラーとなった原因は幾つかあろうが、その根底にあるのはこうしたロマンではなかったろうか。山里寿男氏によるカパーの山のスケッチの愉しげな感じも、本書を手にとって開いてみようと思わせるのに、大きな力があつたらう。また著者が中央線に四千回も乗務し、車窓からの山の観察、撮影には他の追随を許さない経験の持主であったことも、見のがせないことである。

著者は車窓からよく山を見、カメラにおさめたばかりでなく、本書にとりあげた一三二座へは総て登って書いている点も、簡単には真似のできないことである。そのうえ山の歴史、故事実歴などに詳しく、古書の引用もあつて読者は本書によって教えられることが少なくない。ただ愉しい本というだけではないのだ。また著者が本会山

志賀高原植物

生態系

観察探索行

日時 六月二十二、二十三日

主催 科学研究委員会

今年は夏の志賀高原の自然を楽しんで頂くことを主眼として探索行を企画した。梅雨のさなかのことで天候が一番気がかりであったが、雨に降られることもなく、静かな志賀高原の初夏を満喫できた。

二十二日夕刻、平床の石の湯ロッジに集合、長野原から白根経由でこられた方も何人かあったが、白根山は未だ登山禁止が続いていた。ロッジ心づくしの豊かな夕食の後、講演とスライド映写。講演は木戸池近くにある信州大学付属自然教育園の渡辺隆一氏から植物生態系のお話を伺う予定であったが、同氏が、精密検査のため急に入院されたため、同氏の撮影された多数のスライドについて夫人富美子氏から説明を伺った。

そのあと山の気象講座の講師をお願いしている気象学者で山岳会員でもあられる大井正一氏より石鎚山でとられた美しい「たきぐも」のスライドをみせていただき、「たきぐも」の成因についてお話を伺った。雲の生因、消滅の機構と山の影響のお話は大変参考になった。講演会のあと、参加者

梨支部にあって、木暮翁碑前祭をまもり続けてきた気骨あるサムライであり、そこで知り合った先輩友人からも養分の多くを吸収していることが本書を読むと、よく了解される。

とりあげられた山の中には、大唐松山、鞍掛山、雨乞岳、経ヶ岳、鉢盛山など、かなり高度があっても、あまり登山者に登られてない山があるのも、私には嬉しいことだった。雨乞岳の近くには、現行の色刷りの五万図からはその名が消えてしまっていたが「鬼の窓」というギャップが、並行する尾根の二箇所にある。私はナガレコンバからその二つを確認して、なるほど面白い地形だと思った。私をもっと若ければ、そんな処を探ってみたいと思わないではいられない。

富士山が六回とりあげられているのも、実に巧みな構成と思う。中央線の車窓からは富士が処々で見えるのを経験した人は多いはずである。その大小、遠近によって現在列車の走っている位置が判り、たいへん懐かしい気分になるものである。

頁数の関係で載せられなかった山のあるのを著者も「おわりに」で述べている。せめて、その自己紹介をかねた懇親の一時をもった。

の山名と簡単な説明でも書いておいてくれたら、と思った。例えば古く「北相の一角」にとりあげられた連行峰の付近とか、斑山の奥の津金山一帯のことなどを。

挿入の写真は殆んど全部が著者の作で、製版もよい。また藤本一美氏の展望解説図は正確で見事な作である。

A5変形判 二八六ページ 口絵折込カラー写真一葉 一九八五年二月一日 実業之日本社発行 定価一九〇〇円 (望月達夫)

片雲往来

—私の山路歷程—

上村幹雄著

「新潟駅にはすでに黒装束に包まれた足袋脚絆姿のマタギと紛らう仲間がちらちらしていた。きりりと引締った軽快なスタイルが心地よく、頼もしい。駅頭には人は疎らであるが、人々の好奇な視線にぶつかり途惑う。総勢二二名の異様な集団であるから当然であろうが、現代版、中国『水滸伝』の中にある梁山泊の群衆だねと筒井君はおかしがる……」

これは「飯豊川を遡る」の一節である。時には越後弁の会話ももちろし。

翌二十三日は午前中は何とか保ちそう空模様、ロッジ前で一同

じり、いかにもたくましい越後人らしい地方の息吹が感じられてほほえましい。吹雪の山の記録あり、楽しい山行あり、筆者の縦横な筆が走る。まさに片雲往来である。

まず、本書を手にして大変な労作だと思う。何しろ二段組みまで混じって本文七五〇頁、さらに別冊・年譜一七一頁がついているのである。

本をつくるという行為。それは筆者の分身を造るに等しい。筆者が心血をそそいで書いたこれだけの大冊——ここに一登山者がほぼ半世をかけて歩んだ結晶の輝きがある。「山のあるがままの姿を、心象として」とらえようと務めた筆者の精神的風土を培った山への行動の軌跡がある。それだけに誠にその内容も重く厚いのである。

紙数の関係で、抽象的な賛辞はやめて、具体的な内容を紹介しよう。

本書の構成は、若き日の山々、片雲の歌(詩歌)、躍動の山・心象の山々、山への思考、同僚とともに、「梁山泊」建設回顧、映彩の山仲間と共に、の七章からなっている。

行動の範囲は殆んど越後とその周辺だが、それらの山々と仲間達への限りなき愛情そしてロマンが

の記念撮影をすませ、ロッジ支配人、生沼忠明氏の案内で、わたす

秘められている。強烈な個性と哲学で貫かれてもいる。そして多分に文学的な中にも「山への思考」のような登山技術書としての解説も怠らない。

また筆者が「生きた証(あかし)」として歩んだ回顧はすぐれた紀行文、エッセイだが、それがまた貴重なガイドにもなっている。山の楽しみ方も多彩だ。写真、イラスト、詩あり俳句あり歌謡曲あり短歌ありなのである。

別冊に至っては三十数年にわたる山行が克明に記され、その数もさることながらその几帳面さに敬服する。恐らく筆者は大変なメモ魔ではなかったかと思う。とても凡人にはまねの出来ないことである。

広ごれる百七十里越の峰語らいたむその装いのこと

これが、長い山岳生活を通じて辿りついた今の心情の凝縮の一首なのではなからうか。

A5判 昭和六十年六月十日発行 学生書房刊(新潟市営所通一電〇二五二—22—一九八七〇) 定価五〇〇〇円(限定版)

(小倉厚)

図書紹介

げ群生の田の原温泉を経て、三角池、上の小池、長池とれんげ

つつじ、むらさきやしをつつじの花を染しみつつ美しい新緑の山道を歩く。途中渡辺富美子氏や一行の中の日本山岳会自然保護委員の

方々から植物の名前や特徴を教え
て頂く。
自然教育園は志賀山のふもと
の日本山岳会自然保護委員の
白樺、岳樺と針葉樹の混成林の中

にある。志賀山熔岩台地のおたの
もうす平は時間の関係で遠望する
に止まったが、おもしろびそやこ
めつがなど針葉樹の原生林で、一

山の気象と気象学(一)

日時 一九八五年五月九日(木)
講師 大井正一氏 場所 ルーム

雲の見方 積乱雲Cb たちぐも (1)雄大積雲の頭部が負30℃以下となり、氷化してぼやけたものという。(2)このぼやけた頭部が圏界面に押えられて、水平に拡がったものをかなと雲、あるいは偽巻雲という。Cbは一般に雷を伴なう。(3)ただし山での雷による遭難は必ずしもCbに依らず、Cuの小塊が尾根を越す時にも起るので注意が必要。(4)このような熱雷による事故は午後に限られるが、Cbによる雷害事故は夜や早朝にも起っている。

を等号でつないだものが風の運動方程式となる。
連続方程式 大気中に考えた単位体積の箱の中の空気の変化はオイラー変化で計算されるが、オイラー方程式によつてこれはちょうどラグランジュ変化になる。これを密度×風の発散に等しいとしたものが連続方程式である。
風の運動方程式は上下、前後、左右の三ヶあり、これに連続方程式を加えた四ヶを解けば大気の流れすなわち各点での風向と風速が求められる。
地上五〇〇mbではちょうど連続方程式の発散項が0となるので、非発散高度と呼ばれ、ここでは天気図が変形することなく東に移つて行くので数日後の天気予報に利用できる。たとえば今年の四月は西谷で天気が悪く、五月は東谷で天気が良かった。毎土曜、毎日新聞には五〇〇mb天気図が掲載され、週間予報が行なわれている。

第五章 大気の力学 風向と風速 三杯風速計の風程を観測時間の六百秒で割ったものが風速であるが、実際はエーロペンで自記している。三成分に分けて測るには超音波風速計を用いる。上層風についてはレーウィンゾンデによる自動追跡を国内一七ヶ所で毎日九時と二一時に行なっている。

運動方程式 大気中の或る時刻、或る地点の空気の密度は場所的にも時間的にも変化する。同時に刻にuだけ離れた地点の密度の違い $\frac{\partial \rho}{\partial x}$ をオイラーの場所的变化、同じ場所で一秒間に生ずる密度の変化 $\frac{\partial \rho}{\partial t}$ をオイラーの時間的变化と呼ぶ。一つの気塊が実際に所を変え、時間的に密度を変える実質変化 $\frac{d\rho}{dt}$ をラグランジュ変化と呼ぶ。両者の関係を示すのがオイラー方程式で、全微分と偏微分の関係に相当する。さてニュートンの方程式によれば質量×加速度が力であるが、大気の運動に適用して見ると、質量が密度 ρ 、加速度が風速のラグランジュ変化 $\frac{du}{dt}$ 、力が気圧の場所的オイラー変化 $\frac{\partial p}{\partial x}$ に相当するもので、両者

を等号でつないだものが風の運動方程式となる。
連続方程式 大気中に考えた単位体積の箱の中の空気の変化はオイラー変化で計算されるが、オイラー方程式によつてこれはちょうどラグランジュ変化になる。これを密度×風の発散に等しいとしたものが連続方程式である。
風の運動方程式は上下、前後、左右の三ヶあり、これに連続方程式を加えた四ヶを解けば大気の流れすなわち各点での風向と風速が求められる。
地上五〇〇mbではちょうど連続方程式の発散項が0となるので、非発散高度と呼ばれ、ここでは天気図が変形することなく東に移つて行くので数日後の天気予報に利用できる。たとえば今年の四月は西谷で天気が悪く、五月は東谷で天気が良かった。毎土曜、毎日新聞には五〇〇mb天気図が掲載され、週間予報が行なわれている。

転向力 コリオリの力 地球は一定の角速度 ω で回転している。地上で大砲を打つと、砲弾は宇宙に対してまっすぐ飛ぶので、地球に乗っているわれわれがみると右にそれるように見える。つまり、砲弾やロケットには航跡に直角に左から或る力が働いていると考えなくてはならない。この力を転向力といい、その大きさは緯度 ϕ の地点で $\rho\omega\sin\phi$ で与えられる。風が等圧線に平行に吹くのはこの力のためである。

これに対し、地面に接して動く自動車などに転向力は働かないから、自動車の右のタイヤが余計にへる等というのは冗談に過ぎない。

出席者 十二名
(中村純二)
科学研究委員会

方車道近くに多い白樺などは人間が入りこんでからのものの由。教育園の展示館、高山植物園を見学、蓮池のあやめを観賞、サンパレーから幕岩溪谷に入り帰路につく。途中、幕岩の見事な柱状節理と大滝をみる。パーティの先頭を歩いた方はカモシカに出会った。一時過ぎ石の湯ロジに帰着昼食後、各自長野原方面、湯田中方面へと帰路につく。

今回は行動時間が半日しかとれず、ものたりない思いをされた方もあったかと思うが、初夏の美しく静かな志賀高原を楽しむことができた。

探索行の企画実行に全面的にご協力を頂いた渡辺隆一、富美子夫妻、生沼忠明氏に心からお礼を申し上げます。

参加者 古川利雄、古川竹世、及川昭、及川弓子、武田勝、武田美千代、宮野芳一、小泉昭三、鈴木嶋夫、渡辺正臣、赤松光、渡部温子、大井正一、麦倉啓、奥野道治、奥野玲子、川崎きぬ子、小泉馨夫、小泉苑、山口一孝、高橋恭子、伊井野善重子、松丸秀夫、斉藤かつら、梅野淑子、石井恵美子、高橋詢、以上二十七名
(高橋 詢)

昭和六十年年度総会と

天山山登山報告

熊本支部

場所 民宿『平家の湯』

日時 五月十八、十九日

九州山地に源を発する緑川が、支流の内太臣川と合するあたりを矢部町目丸という。ここは九州脊梁の最高峰、国見岳の登山口として古くから登山者に親しまれてきたところだが、近年、大規模なヤマメの養殖と古くからの鉱泉(重曹泉)で有名になった。昭和六十年年度の支部総会は、この民宿『平家の湯』で開催することにした。

十八時半、出席者が全員揃ったところで石井会員を議長に選んで議事に入った。本年度の事業計画として、例年の秋季例会のほか、夏期例会開催の希望があり、次期委員会検討することになった。支部規約については、今回全面的な見直しを行なった結果、改正案を議決した。役員改選は、残任期間を持つ支部長を除き、総会の委任により次期委員会で選出することになった。その他の議事として、西沢支部長から八十年記念行事としての中国奥地のトレッキングや、祖母・傾山群の自然保護要請(東九州支部)について説明あり、また工藤会員が中心になつてすすめているカラコルム遠征計画(パツラ山群)：熊本岳連：について松本会員から概要の説明あり、支部会員が参加する場合はバックアップを検討することにした。

参加者 奥野正亥、西沢健一、石井久夫、本田誠也、田上敏行、和仁古昇、大木野徳敏、松本莞爾、菊池更生、門脇愛子、川端浩文、河上洋子、中村誓紀、鶴田佐知子(会員外) 前田辰男、大木野マツ子

(田上敏行)

設立二十五周年

記念山行

秋田支部

秋田支部設立二十五周年記念山行は、去る六月二十二、三の両日、県内の忘れ去られた山々を探勝するをテーマとして、当県有数のマ

追悼

永年会員 栗飯原健三氏

(会員番号七九二番)

「山」四八〇号の物故者欄に栗飯原さんのお名前を見出した。栗飯原さんは隠れたノルウェー語の研究者であり、ノルウェーの多くのペンフレンドと文通して、両国民の親善に寄与したこと

で、昭和五十三年二月ノルウェーのハラルド皇太子が神戸訪問された際「セント・オラフ勲章」を授与されたことがあった

「山」三九四号参照)
私が同氏を知ったのは、もうずい分昔のことだが、ロングスタッフの『わが山の生涯』を訳出した昭和三十年ごろ、スカン

ジナヴィア系の地名の発音について、同氏の教えを受けたことがある。また同氏からはその後ノルウェーの友人たちに招かれて同国を訪れたという、楽しい便りを戴いたこともあった。

先日偶々戦時中の本会のことを調べていたら、同氏は昭和二十年ごろ幹事あるいは評議員をつとめ本会再建に際し関西にあって尽力された会員であることを知った。入会は大正十年、在籍六十数年におよぶ古い会員だった。謹んでご冥福を祈る。

(望月達夫)

昨夜の熊祭りが雨乞いと悟られ早朝より雨。一同それでも登る気十分で地元の加賀谷会員の道案内で登山決行。

午前八時、根子部落より延びる林道を車で少し行き、駐車場(広場)前の右手側より歩道に入る。小沢を渡って、すぐ美事に育生した杉美林地帯に入り、ミズ、アイコ畑を尻目にガス、小雨の中をグングン登る。杉・ナラ・ブナの混生林を抜け、水場を過ぎると道は右方へ延びており、ガザの咲く急坂を登って更に右方に廻り込むと根子岳からの支稜線に出る。少し行くと道は二分し、左方の稜線に上ると休憩地に着く。道はここで終りであり、ここを実質的山頂とみなしている。

ここから山頂近くまで廃道を辿り、強雨の中でヤブ漕ぎの末ようやく三角点を発見する。
下山は三々五々山菜取りに早変わりしたのは言うまでもない。午後一時、駐車場に帰着し一路近くの打当温泉へ。昼食とマタギ資料館見学の後、午後四時解散した。

・ルム日誌

七月

1日(月) 図書委員会
 5日(金) 評議会
 8日(月) 募金委員会
 9日(火) 海外委、八十周年準備委、山研委
 10日(水) 理事会
 11日(木) 科研委(山の気象)
 15日(月) 図書委
 16日(火) 八十周年準備委
 19日(金) 八十周年準備委、科研委
 22日(月) フィルム委
 23日(火) 自然保護委、婦人懇談会
 24日(水) 八十周年展委
 29日(月) 総務委
 31日(水) 集会委、婦人懇談会
 今月の来室者協名

会員移動

夫婦会員へ
 5122 大谷 優
 9666 大谷セツ子
 9687 魚本 亮子
 5997 魚本 定良
 8000 磯野 剛太
 9156 磯野 温子
 改姓
 9156 関山 温子→磯野へ
 9247 浜本多佳子→浜谷へ
 夫婦会員
 9280 浜谷 光安
 9247 浜谷多佳子

退会

5984 永高 賢
7184 福田 宏年
支部変更

9447 松林のりこ(信濃へ)
物故
7256 下山 隆己(6・17)
8285 高波 隆男(3・)

お知らせ

●フリークライミング・
ボルダリング講習会

日時 10月19、20日の土、日
場所 城ヶ崎、費用は八千円で、
講師は池田功氏、申込は10月13
日まで事務局へ。詳細は指導委
小林まで
* 指導委・青懸

●紅葉会案内

日本山岳会静岡支部主催の紅葉
会も、今年で二八回目を迎えるこ
とになりました。

このところ紅葉会は、温泉地か
ら遠ざかっておりまして、今
回は静岡市の奥座敷、深山幽谷の
地、梅ヶ島を選び、温泉につかり
ながらの酒と紅葉を楽しんでいた
だく予定です。

前夜祭は河原で各種の酒と山菜
料理で歓談し、翌日は日本三大崩
れの一つである、大谷崩、八紘
嶺、安倍峠に登ります。

湯治気分を味わいたい方は、安

八十周年記念事業第二次募金応募者芳名

(昭和六十年八月七日まで、敬称略、順不同)

(四口) 前田宗寿 (二口) 松田
章 豊中貞子 浅川欣吉 笠間嘉
孝 青木 巖 土田平三 川瀬幹
夫 小田 薫 長田義則 福田文
二 遠藤 登 的場大祐 宮本忠
直 森川洋佑 室賀輝男 丸芳五
郎 上野博基 (一口) 梯 安夫
桜井善志 久保三朗 赤沼 節

●現地小集会

集会委員会では、今年度、色々
なタイプの山行を企画しました。
是非ご参加下さい。

一、碧岩・大岩(一〇一三)
十月十日(木) 九時三十分以下
仁田駅集合
・西上州(群馬南部)の山で樹海
に浮ぶ岩峰。岩稜の登りがちょ
っとあります。

・ルート 下仁田(バス) 勸能→三段の
滝→碧岩→大岩→砥沢→下仁田
・歩行時間 五時間 十石峠(五
万図) 地図に山名なし

二、米子沢(巻機山)
十一月三日(日) 七時に清水部
落集合
・長いスラブの沢登り。ワラジの
感触を味わう。頂上付近は草原
と池塘。健脚向

・ルート 六日町→清水→桜坂→
米子沢→頂上→清水
・歩行時間 九～十時間 越後湯
沢(五万図)

三、石老山(六九四)

小林義明 小橋廣幸 高橋信博
上村秀雄 福田光子 藤江幾太郎
魚本定良 川越孝次 菅沢欣吾
小野利次 (その他) 山下嘉彦
(〇・二口)
応募会員数累計 一七六八名
応募口数累計 四二五・七口
金額累計二一、二六三、七三三円

十二月二十二日 相模湖駅に九
時集合

・誰でも楽しんで登れるのびやか
な山。道志の山の眺めが良い。
・ルート 相模湖駅→石老山入口
→顕鏡寺→石老山→大明神→鼠
坂→相模湖駅

・歩行時間 三時間 上野原(五
万図)
四、独鈷山(二二六六)

二月二日(日) 信越線上田駅に
十時集合
・ビッケルとアイゼンの必要な急
峻な山。日本離れした風景、山
麓は信州鎌倉といわれるほど古
い神社、寺が多い所。

・ルート 上田駅→中禅寺→不動
滝→独鈷山→中禅寺→上田
・歩行時間 四～五時間
五、御座山(二二二二)

三月八日(日) 八日十一時に
小海駅集合
・佐久の名山で、どっしりした山
体は風格を感じさせる。
・ルート 小海駅→白岩→御座山
無人小屋(泊)→頂上→中島→小
海駅

※募金の最終払込期日は六十年九
月末日でございませう。お申込み
いただいたまま未送金の方、分割払
込みで後の入金なき方、期日まで
にお払込み下さるよう願います。
(募金委員会)

・歩行時間 二日間で七時間
十石峠(五万図)
以上参加希望の方は事務局にご
連絡下さい。案内状をお送り致し
ます。

●アメリカ山岳会
登山隊来日

本会の行なっている海外友好交
換登山の一環として、今回は、ア
メリカ山岳会より六名が本会に派
遣され、十月十五日より二十五日
まで日本で登山を行います。

リーダーはアンディ・エムブリ
ック博士で、男子四名、女子二名
の内、世界的な女流クライマー、
リン・ヒル嬢も含まれています。
予定では、小川山、谷川岳、穂
高の山行を行いますので、会員
諸兄姉のご参加を歓迎いたしま
す。

詳細は本会事務局か海外委員会
にお問い合わせ下さい。
海外委・青懸委・
指導委・集委

●安達太良と温泉の山旅(写真山行)

シヤッターチャンスをおねらって、紅葉の安達太良山を散策しましょう。

安達太良山登山↓温泉(泊)↓白滑八丁を廻行予定

日時 十月二十五日(金)夜〜二十七日(日)

集合 二十五日、二十二時 新宿スバルビル前(バス)
会費 会員一万七千円 非会員一万九千円

講師 渡辺正臣氏

なお、写真勉強会を十月十七日、発表会を十一月六日にルームで行ないます。

申し込みは十月十六日までに事務局にお願い致します。

集会委員会

●自然保護委員会

全国集会(御在所岳)

東海支部の後援により御在所岳山麓の湯の山温泉で開催します。

JACの自然保護活動の在り方を討議しますので、ご意見、興味のある会員多数の参加を歓迎!

日時 十月十九日(土)午後四時〜二十日(日)午後一時解散。

場所 ゆずりは荘(近鉄四日市乗換え 湯の山駅下車)。

会費 宿泊費(三食)懇親会費記

念品代込み、一万円。

申し込みは山岳会事務局まで、詳細案内をお送りします。

自然保護委員会

●関西支部五十周年記念会晩さん会

日時 六十年十月十九〜二十日

場所 仁川ハイッ

費用 一万円

申込問合せ 神戸市灘区鶴甲三丁目二九一〇六 桑田 結

電話 078-851-0291

●図書交換会

日時 十月二十六日(土)午後二時

場所 日本山岳会集會室

この会は、会員同志が不要な山の本を持ち寄り、交換しあうのが目的で、松方三郎氏の提唱に始まり、本年度十八回目になります。

例年に増して多数のご出席をお願いいたします。

(出品申込み方法) 〆切 十月九日(水)

申込・問合せ 図書委員会まで 東京近郊の方で多数出品される場合は委員会に戴きに上ります。

地方の方は宅急便で送って下さい。なお、出品図書の販売価格については、特に希望価格の明示がない場合は、委員会に任一願い

ます。また、売上げの二割を手数料として申し受けます。

会員各位、とりわけ山岳図書に關心ある方の積極的なご参加、ご出品を期待しております。

図書委員会

●シンポジウム

「ヒマラヤの生態系と環境」

昨年に引き続き、ヒマラヤの生態系を中心に第二回目のシンポジウムを左記により開催致します。多数の会員のご参加をお待ちしております。

日時 昭和六十年十一月三十日(土)午後一時半〜五時

懇親会 午後五時半〜八時

場所 中野サンブラザ集會室(中野駅北口前)

会費 千円(予稿集代を含む)、懇親会費 約三千円

主催 (社)日本山岳会

(社)日本ネパール協会

テーマの詳細や講師については申込方法や期日とともに次号「山」に掲載の予定です。

科学研究委員会 自然保護委員会

●医療委員会講演会

山行準備には、装備計画・食糧計画が必須である。持参する食糧も日常生活に利用しているものから、乾燥品、或いは調理済み食

糧まであらゆるものが出まわっている。しかし準備の段階では、価格と重量、見た目の美味しさが主体となり、その栄養価や消化・排泄のことまでは気が回らないことが多い。今回、左記の要領で「登山中の栄養と食物」という演題のもとで、その道の専門家のお話しを聞く会を計画しましたので、会員の多数ご出席をお願いいたたく、ご案内致します。

日時 十月二十四日(木)午後七時から

場所 山岳会ルーム

演題 登山中の栄養と食物

講師 信州大学心臓血管病研・環境生理 助教授 本山十三生

医療・婦人懇談・集会・科学各委員会

●高郷山荘だより

昨年開催致しました高郷山荘の案内パンフレットを作りました。ご希望の方は集会委員会までご連絡下さい。ご利用が少ないので多数の方のご利用をお待ちしております。なお、利用料金を左記の通りに変更致しました。

一泊の料金

冬期(十二月〜三月)

大人 八百円、小人 五百円

その他(四月〜十一月)

大人 五百円、小人 三百円

ただし七歳以下は無料

●会員懇談会

日中友好「納木那尼」峰合同登山隊報告会

日時 十月十五日(火)六時半

場所 本会ルーム

講演 日本側隊長 斎藤惇生

納木那尼峰初登の模様をスライドとビデオを使って報告します。

海外委・総務委員会

●ドイツ山岳劇映画

(銀嶺に帰れ)の夕べ

脚本、監督、主演 ルイス・トレンカー、共演 マリア・アンデルガスト、一九三七年、ドイツ・ユニバーサル映画

日時 十一月十五日(金)六時半

場所 本会ルーム

山岳映画の創始者、アーノルト・ファンクの後継者、ルイス・トレンカーの劇映画を上映します(今後、本邦で上映されることはないと思われます)。

海外委・総務委員会

昭和六十年九月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会
発行者 今西 寿雄
編集代表 岡 沢 祐吉
電話東京(20) 四四三三
振替口座 東京三 四八二九番
東京都港区赤坂二丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂